

令和3年度学校防災教育実践モデル地域研究事業の取組

久万高原町教育委員会
久万高原町立直瀬小学校

1 取組の目的

- (1) 防災教育の充実
- (2) 防災管理体制の整備・防災環境の整備の推進
- (3) 教職員研修の充実
- (4) 家庭や地域、関係機関との連携の推進

2 取組の内容

- (1) 防災教育の充実

ア 防災教育参観日 <6月13日(日)>

- 授業公開(命・防災に関する内容)

「命・防災」に関する内容をテーマに参観日において授業公開を行った。発達段階に応じて、現時点で児童それぞれが命や防災について考えるきっかけとなった。また、保護者の方々にも地域の防災について一緒に考えていただくよい機会となった。



- 救命救急法講習会(5・6年、保護者参加)

水泳授業が始まる前に高学年児童と保護者全員を対象とした救命救急法講習会を行った。新型コロナウイルス感染症対策のためリモートでの実施となったが、タブレットで学校側の様子を間近で映し、消防署の様子はプロジェクターに映し出すことで、お互いの様子を確認しながら進めることができた。映像や音声もしっかり届き、児童・保護者から質問したり、アドバイスを受けたりしながら学ぶことができた。



○ 避難訓練

地震による火災を想定した避難訓練を行った。消防署にはリモートで、保護者の方々には間近で見ていただくことができた。児童たちはいつも以上に緊張した面持ちで、黙って素早く避難していた。



○ 防災に関するビデオ視聴、消防署の方からの講話（リモート）

児童、保護者で「火災の原因や被害について考える内容」と「これまでの震災の様子や避難についての内容」のアニメーション動画を視聴した。講話では、災害が起こる前に自分たちの家や地域の危険箇所を知ること、備えをすることが大切であると教わった。



○ 引渡し訓練

発災時における保護者・家族への引渡しをスムーズに行うため、引渡し訓練を行った。学級担任は、迎えに来た方が引渡しカード記載の保護者・家族であることを本人に確認し、保護者には、迎えに来た児童名と児童との続柄を学級担任に告げていただいた。慣れない動きであったが、お互い真剣に取り組んでいた。



イ 防災教室の開催 < 7月24日（土） >

○ 災害時の避難の仕方・避難場所について（役場総務課危機管理室より）

令和3年5月20日から大雨警戒レベルが変わったことや、直瀬地区における避難場所・土砂災害警戒区域についての説明があった。



○ パーテーションの組立て

防災倉庫備蓄品に新たに追加されたパーテーションを防災教室の参加者全員で組み立てた。子ども・保護者・地域の方々に力を合わせて試行錯誤しながら完成させた。発災時における避難者スペースの確保やプライバシーの保護に役立つことが分かった。



○ 災害時の調理（非常食）について（消防署より）

災害時の非常食についてご講話いただいた。発災時には電気・ガス等が止まり普段使える調理器具が使えないため、身の回りのものを使って簡単に調理できる方法を実演いただいた。また、3日間分程度の非常食を普段から家庭に備えておくことが大切であると教わった。



○ 防災倉庫の資材・機材の説明（消防署より）

校内に設置している防災倉庫の備蓄品についてご説明いただいた。投光器や発電機、ワンタッチテント等、災害時に必要な物が常に備わっていることやその使い方についてもご指導いただいた。



○ 簡易トイレの使い方（消防署より）

簡易トイレの設置方法や使い方についてご説明いただいた。災害時に特に問題となるのがトイレであることや設置について気を付けることを教わった。



○ 着衣泳法の訓練（消防署より）

中・高学年を対象に着衣泳法についてご指導いただき、服を着たまま水の中に入るとどれだけ動きにくくなるかを体験した。また、救助を待つ時は身近な浮く物を胸に抱え仰向けに浮かぶべく体力を使わないことや、救助をする時にもペットボトル等が使えることを教わった。



ウ 少年消防クラブの活動

○ 防災看板づくり

児童は、防災学習の中で身近な山を守ることも防災につながると考え、看板を製作して地域に呼びかける啓発活動を行った。約20年前に少年消防クラブが立てた看板がかなり劣化しているため、新しく作り直して立て直すこととした。



エ 授業における防災学習

○ 危険箇所探し

低学年は、自分たちの学校の中にある危険箇所を調べた。大地震が起こった際に、危ないと思われる場所を写真に撮り、その理由を考えて発表した。



○ 地域探検（防災マップづくり）

中学年は、自分たちの住んでいる地域を探検し、危険箇所を調べた。大雨や地震等が起こった際に危険だと思われる場所を地図に示し、みんなに知ってもらおうと防災マップを作った。



○ これまでの災害を知り、防災について考える学習

高学年は、これまでに起きた災害について調べるとともに、これから大きな災害が起こった際にはどのようにすれば身を守れるかを考えた。時と場所において避難方法が違うことや普段の生活の中での備えの大切さを理解し、避難所生活において自分にできることも考えることができた。



オ 防災教育アンケートの実施

防災に関する意識等の変化をみるために防災教育アンケートを実施した。年度当初の防災に関する児童の意識や知識の状況を把握できたことで、防災教育を進める上で参考になった。

防災教育アンケート調査結果		R3年 6月30日 全校児童14名回答		R3年12月17日 全校児童14名回答	
知識					
1	家で緊急地震速報が流れたら？				
	ア 棚が倒れないように押さえる	0人		0人	
	イ テーブルなどの下にかくれる	14人		14人	
2	登下校中に地震が起きたら？				
	ア 塀や建物の近くで待つ	2人		0人	
	イ 塀や建物から離れて頭を守る	12人		14人	
3	地震で震度7とは、どんな状態になるでしょうか？				
	ア はわないと動けない	7人		2人	
	イ 全く動けない	4人		12人	
	ウ なんとか歩ける	3人		0人	
4	家にいることが危険な時、どこに避難すればよいか知っていますか？				
	ア 知っている	9人		12人	
	イ 知らない	3人		1人	
	ウ 分からない	2人		1人	
家庭					
5	家族で地震や災害時の避難の方法を話し合ったことがありますか？				
	ア はい	5人		6人	
	イ いいえ	7人		8人	
	ウ 分からない	2人		0人	
6	地震の後に家族でどうやって連絡を取り合うか決めていますか？				
	ア はい	1人		1人	
	イ いいえ	9人		9人	
	ウ 分からない	4人		4人	
7	家で大きな地震に備えてやっていることがありますか？ (当てはまるすべてに○をつけてください。)				
	ア 家具の固定	4人		4人	
	イ テレビの固定	2人		2人	
	ウ 非常持ち出し袋	4人		6人	
	エ 非常食	4人		8人	
	オ 飲み水の準備	3人		4人	
	カ ガラス飛び散り防止	1人		2人	
	キ 消火器	1人		5人	
地域					
8	住んでいる所で危険な場所を知っていますか？				
	ア 知っている	10人		13人	
	イ 知らない	2人		0人	
	ウ 分からない	2人		1人	
9	住んでいる所で土砂災害が起こりやすい場所を知っていますか？				
	ア 知っている	9人		12人	
	イ 知らない	4人		2人	
	ウ 分からない	1人		0人	
10	地域の防災訓練に参加したことがありますか？				
	ア はい	3人		10人	
	イ いいえ	7人		1人	
	ウ 分からない	4人		3人	
11	災害用伝言ダイヤルは？				
	ア 119	9人		1人	
	イ 171	4人		8人	
	ウ 117	1人		5人	

(2) 防災管理体制の整備・防災環境の整備の推進

ア 危機管理マニュアルの見直し・避難所運営マニュアルの確認

夏季休業中の校内研修会において、これまでの危機管理マニュアルの見直し・避難所運営マニュアルの確認を行った。令和3年5月20日からの大雨警戒レベルの変更などを受け、使えるマニュアルづくりのために全教職員で考え、見直した。また、久万高原町避難所運営マニュアルをもとに、本校体育館が避難所になった場合を想定して全教職員で配置や役割を確認した。

6	・調評（校長）	
7	・事後指導	・児童に避難行動について自己評価させる。

イ 地震発生時の場合
地震については、その状況に応じて適切な処置をとらなければならない。そのためには日常運営な機会を活用して、以下の指導をしておく必要がある。

(ア) 登下校の場合
○ 家屋・へい・石垣・電柱・地上・地下は危険度が高いため、離れる。
○ なるべく周囲に何もない安全な場所を速に避難する。
○ 傾斜地は横の方向に避難する。
(イ) 教室で学習中の場合（家庭）
○ 火災使用の際は、まず火を消す。
○ 窓・出入口を開ける。
○ 机の下に入る。
(ウ) 遊放時の場合
○ 建物・へいから離れる。
○ 教室にいる者は、机の下に入る。
○ 階段にいる者は、踊り場が安全率が高い。

○避難要領
○通報 緊急地震速報（アラート）
○指示「（訓練）地震発生」
「児童のみなさん、学習を止め、てすぐ机の下に身を隠しなさい。」
「ドロップ」→まず座く。
「カバー」→頭を守り。
「キックダウン」→動かない。
○机の下で待機。
○火災発生（火災の要請）

【 危機管理マニュアル 】



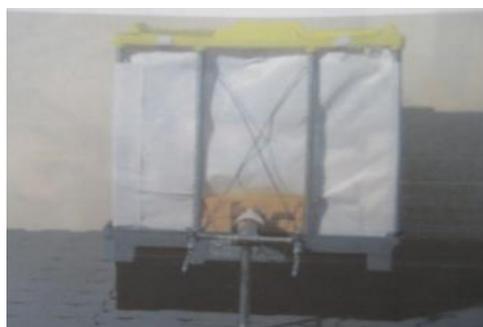
【 避難所運営マニュアル 】

イ 防災用具の充実

本校における防災に関する備品・備蓄について見直し、環境整備を進めた。また、町から新たに、体育館を避難所として使用するためのパーティションと大量の水を保管できるホリフトウォーターが配備された。



【 パーティション 】



【 ホリフトウォーター 】

ウ 久万高原町総合防災訓練の実施

町内各地区において防災訓練が行われ、直瀬地区では更新された防災行政無線子局の取り扱いについて説明会が開かれた。自主防災組織会長をはじめ、自治会長、学校代表等が集まり、非常時に子局から放送を流す手順とアンサーバック（連絡電話）の使い方を教わった。



(3) 教職員研修の充実

ア 授業公開

町内小・中学校の先生方を対象に、防災教育の普及・促進を目的とした授業公開を行った。想定を超える大きな地震が起こった時、避難所において小学生の自分に何ができるのかを問う内容であったが、個々に周囲の状況や家族の様子を踏まえながら、自分なりの考えを発表することができた。また、これまでの防災学習の取組についても発表した。



イ 防災教育講演会

愛媛大学防災情報研究センター副センター長 二神 透氏をお招きし、「久万高原町に起こりうる災害と防災教育」と題してご講演いただいた。久万高原町に起こりうる大地震の被害想定や直瀬地区における土砂災害警戒区域について詳しくお話しいただいた。ハザードマップに記載されていることがすべてではなく、災害は想定を超えてくることを常に考えておく必要性を教わった。



ウ 防災看板の確認

少年消防クラブで提案のあった防災看板について、直瀬地区に現存する防災看板を教職員で調査した。約20年前に少年消防クラブが製作したものはかなり劣化しており、取り替えが必要であった。



エ 教職員の防災士資格の取得

現在2名の防災士資格を有する教職員が在籍しているが、地域における身近な防災リーダーの存在は地域住民の生命と安全を確保するうえで必須であり、今回2名が防災士養成講座を受講する予定である。

(4) 家庭や地域、関係機関との連携の推進

ア 消防署と連携した避難訓練・起震車体験

消防署の指導のもと、避難訓練を実施した。また、起震車により、久万高原町に起こりうる大地震（震度6強）を体験することができた。



イ リモート防災アトラクション <10月31日(日)>

町が主催した愛媛県初開催となる「体感型 防災アトラクション ザ・リモート」が実施され、児童と教職員が数名参加した。タブレット・パソコンによってライブで繋がり、焦りや混乱を感じながら発災時に問われる様々な「選択」や「防災謎解き」を行った。



ウ 防災教育の取組を掲示し、保護者・地域の方々に発信

本校の防災教育への取組を掲示板にまとめ、2階のホールに設置した。参観日や人権教育推進大会等で保護者や地域の方が学校に来られた際に、取組の様子を分かりやすく伝えるとともに、今後の取組への参加を呼び掛けることができた。



エ 学芸会での学習発表

防災の学習で学んだこと、保護者や地域の方々に知ってほしいこと、呼び掛けたいことをそれぞれが資料にまとめ、学芸会の中で発表した。自分たちが災害時にどのような避難を考えているのか、災害時への備えをどのように進めているのかを分かりやすく伝えることができた。



オ 久万高原町広報による発信

町が発行している「広報 久万高原」に毎月掲載されている「消防だより」において、直瀬小学校で開催された防災教室の取組を取り上げていただき、防災意識の啓発に寄与することができた。

【6月号】

【9月号】

3 取組の成果

- (1) 防災学習や体験活動を通じて発災時の対応や日頃の備えについて深く考えたことで、知識や技能が高まった。
- (2) 保護者や地域の方々、関係機関が一体となった活動を実施したことで、モデル地域全体の防災意識の底上げを図ることができた。
- (3) 町内小・中学校の防災担当教職員を対象に授業公開や防災講演会を実施し、取組を共有したことで、町内全体への防災教育の普及・啓発を図ることができた。

4 今後の課題

- (1) 本事業での学びを確かなものにするため、防災学習を日々の教育活動の様々な場面に位置付け、取組を重ねていく必要がある。
- (2) 発災時には地域と学校の連携が必要不可欠となるため、日々の地域行事や学校行事を通じて地域・家庭・学校が一体となり、地域全体の自助・共助の意識向上を目指した取組を継続する必要がある。
- (3) 新型コロナウイルス感染症対策として大人数での活動が制限された中、リモートで救命講習会を開催するなどコロナ渦における防災教育体制を模索することができたため、今後も更なるICTの活用を検討し、実情に応じた取組を進めたい。